

風水景観における俯瞰景観に関する研究

—韓国農村集落における風水景観に関する研究 その14—

正会員 ○樋口 夏希 ※¹ 同 佐藤 誠治 ※² 同 小林 祐司 ※³
同 姫野 由香 ※⁴ 同 野村 優太 ※¹

都市計画 風水景観 農村景観・集落景観・自然景観

風水 俯瞰景観

1. 集落の対岸側に存在する視点場について

現地調査を行った13集落のうち9つの集落において、集落前面を流れる河川の対岸側に祠堂や亭、遊歩道といった、視点場としての眺望場の整備がされていることを確認した。この対岸側に存在する、眺望場からの視界は開けており、集落を一望することができる。さらに、この眺望場の標高は全て、対する集落の標高よりも10m以上高い場所に位置しており、集落の全体像を把握することが出来るなど、集落を俯瞰することを意識した、視点場としての要素が高いと考えられる。以上のことから、本稿では、韓国における風水景観を持つ集落は自らの集落に対する景観意識が高いものと仮定し、集落全体を見渡すための眺望場となりうる場所からの写真を元に、そこから現れる景観と、構成要素の存在景域について分析を行う。

2. パノラマ写真からみる俯瞰景観

現地調査において得られた、対岸に存在する眺望場からの俯瞰写真を繋げ、パノラマ写真を作成する。写真は集落を中心とし、人間の両眼で立体に見える視野範囲である120°までのパノラマ写真を対象とした。この写真を線画化し、写真に写りこむ要素とその配置、可視域などの項目について分析を行い、結果を考察する。理工図書出版である「風景画と都市景観—水・緑・道・まちなみ—」では、街の全貌を見渡す景観について以下のように述べている。「市街地を俯瞰する場合は、市街地内に特徴的な構成要素が存在しなければならない。市街地の中にシンボリックな建造物が含まれていること、市街地の区切りとなるような公園・緑地等が含まれること、あるいは海辺等の視対象が俯角10度以内に含まれることが必要である。このような市街地を俯瞰するとき「絵になる景観」が得られるのである。」¹⁾ 今回の分析は市街地ではなく、農村集落を対象としたものであるが、以上の内容は今回の結果においても例外ではないと考えられる。その為本節では、シンボリックな景観要素の有無、集落の区切りとなるような景観要素の有無、この二点について考察を行う。図1, 2, 3, 4より、集落の背後に位置する主山^{注1)}、集落の四方に位置する山々^{注2)}は写真の中でも一際目を引く要素であり、シンボリック的存在であると言える。風水では集落の背後に大山があり、周囲を山々に囲

まれているのが良いとされている為、この景観は風水景観における特徴の一つである。また、区切りとなる景観要素については、河川との境界線と田畑が作り出す境界線の二つが確認できた。風水では、集落の前面に水があることが良いとされており、写真においては河川が集落の手前に配置されることが多い。また、田畑は利便性や土地性から河川の近くに配置される為、写真においては河川と集落の間を挟むように配置されることが多く、田畑により境界線が強調されると考えられる。よってこの二つの境界線も風水景観における特徴の一つといえる。以上のことから風水景観ではシンボリックな景観要素、集落の区切りとなるような景観要素が存在することを確認でき、集落の全貌を俯瞰した際、絵になる景観となる可能性が高いといえる。

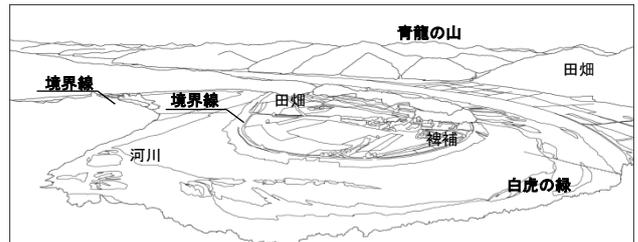


図1 テウン里パノラマ写真線画図

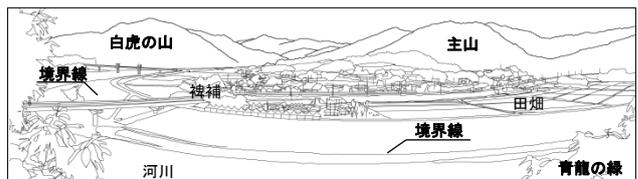


図2 サムガン里パノラマ写真線画図



図3 ハエ里パノラマ写真線画図

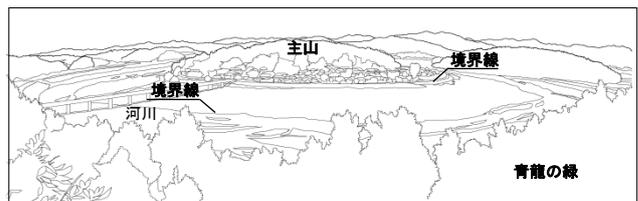


図4 スドリパノラマ写真線画図

3. 距離景別の視対象

Daum²⁾より各集落の白地図を作成し、この白地図に視野範囲と、近・中・遠・超遠景^{注3)}の目安となる200m, 600m, 1km, 1.4kmの距離景³⁾を示した(図6)。また、景観要素を山, 河川, 建築, 禰補, 田畑の5種類に分類し、距離景別に要素の出現回数を計測し(表1), グラフにまとめ作成した(図7)。山は近景, 遠景が最も多く、続いて中景, 遠景と全ての景域において出現していることが確認できた。また、河川においては中景が最も多く、続いて近景, 遠景, 超遠景と、この要素もまた全ての景域において出現していることが分かる。このように、全景域において出現率が高い要素については、写真において連続性の高い要素となり、奥行きがでてくる。対して建築物においては中景・遠景のみに出現しており、禰補, 田畑においては近景域に出現回数はなく、中景・遠景に出現回数が多くみられる。このように、単景域での出現回数が多い要素は、写真において集合感の高い要素となり、領域を視認することが容易であると考えられる。また、山・河川を自然, 建築物を人工, 禰補・田畑を人工的自然とさらに3つにグループ化すると、自然要素はいずれも全景域に存在し、人工要素は中景, 人工的自然要素は中・遠景への配置が約80%を占める結果となっている。模式化すると図8のように表わすことが可能である。視界手前側に自然要素が配置され、続いて人工要素がまとりある要素として配置される。さらに奥の自然要素と人工要素の間を挟むように人工的自然要素は配置され、境界線を際立たせている。以上のことから、風水景観は奥行きのあるパースペクティブな軸景を持つ景観であり、人工・人工的自然要素が自然要素に圍繞された景観であることが分かる。また、風水景観における人工・人工的自然要素は領域を視認しやすい集合感の高い要素であり、この結果が風水景観の特徴であるといえる。

表1 各要素の出現回数

| 集落名 | 山 | 河川 | 建物 | 禰補 | 田畑 |
|--------|-----|----|----|----|----|
| サムガン里 | 近景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 中景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 遠景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 超遠景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| シンウォル里 | 近景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 中景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 遠景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 超遠景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| テウン里 | 近景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 中景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 遠景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 超遠景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ハフェ里 | 近景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 中景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 遠景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 超遠景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ユコク里 | 近景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 中景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 遠景 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 超遠景 | ○ | ○ | ○ | ○ |

図6 白地図例 サムガン里

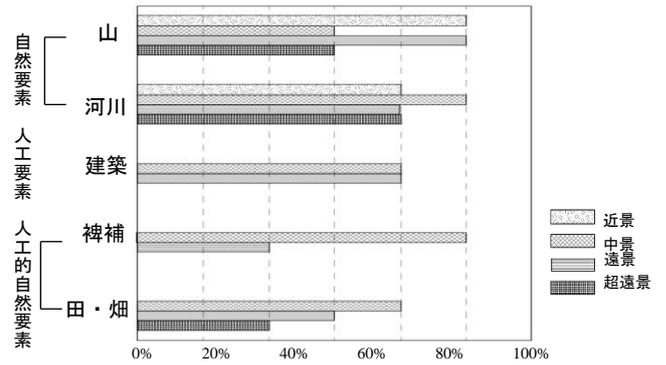


図7 白地図からみた要素の出現率

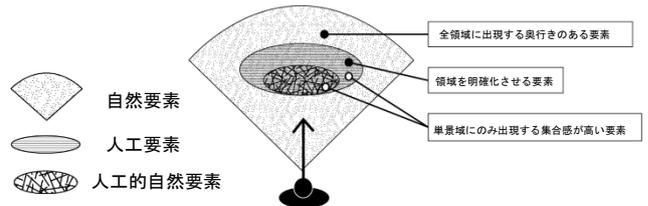


図8 自然要素・人工的自然要素・人工要素の配置模式図

4. 総括

本稿では、現地調査によって得られたパノラマ写真、Daumといったインターネット上の地図サイトによって得られた情報や白地図をもとに分析を行った。2節では、パノラマ写真をもとに風水景観に現れる主山というシンボリック的存在と、河川や田畑による集落の境界線の出現を確認し、この結果が絵になる景観を生み出していることを明らかにした。3節では、自然要素は全景域に現れていることが明らかとなり、写真において連続性の高い奥行きのあるパースペクティブな軸景を持つ要素となることを示した。また、人工・人工的自然要素については単景域での出現回数が多く、写真において集合感の高い要素となり、領域を視認することが容易であることを確認した。以上のことから、視点場から望む風水集落の俯瞰景観は景観評価の高い可能性がある。よって、今後は実験等を取り入れ研究を行っていく必要がある。

【参考文献】

- 1) 萩島 哲著・理工図書株式会社発行：「風景画と都市景観—水・緑・道・まちなみ—」, p127
- 2) 「Daum」, 韓国地図サイト, <http://local.daum.net/map/index.jsp>
- 3) 萩島 哲著・理工図書株式会社発行：「風景画と都市景観—水・緑・道・まちなみ—」, p11

【補注】

- 注1) 主山とは集落の背後に高くそびえる山である。理想的な風水の地形は背後に高くそびえる山(=主山, 鎮山)があり、前方に水流(=得, 水口)があり、周囲には四神砂と呼ばれる「玄武」, 「青龍」, 「白虎」, 「朱雀」を表す山々があることとされている。
- 注2) 集落から主山を背にして見て、左側の山が青龍, 右側が白虎, 向かい側が朱雀とされている。
- 注3) 近景域 0~200m, 中景域 201~600m, 遠景域 601~1000m, 超遠景域 1001~ m
- 注4) 禰補とは、吉地に足りない条件を補うための作法である。

*1 大分大学大学院工学研究科博士前期課程

*2 大分大学工学部福祉環境工学科・教授 工学博士

*3 大分大学工学部福祉環境工学科・准教授 博士(工学)

*4 大分大学工学部福祉環境工学科・助教 博士(工学)

*1 Graduate Student, Oita Univ.

*2 Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ., Dr.Eng

*3 Associate Professor, Dept of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ., Dr.Eng

*4 Research Associate, Dept of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ., Dr.Eng